

儒教の敬老思想と「老人事業」

嚴 錫仁（筑波大学准教授）

はじめに

総務省が平成 26 年の「敬老の日」に合わせて発表した報道資料の「統計からみた我が国の高齢者（65 歳以上）」によれば、高齢者人口は 3296 万人、総人口に占める割合は 25.9% で共に過去最高、そのなかで 75 歳以上の高齢者に注目すれば全人口の 8 人に 1 人の割合となる、という。まさに世界トップの高齢化社会の日本の現状をあらわしている数字といえよう。

また、「平均寿命」をみると、厚生労働省は平成 25 年の時点で男女ともに 80 歳を超えたと発表した（男 80.21、女 86.41）。今は「人生 80 年」は当たり前のように受け入れる時代なのである。江戸時代の儒学者の貝原益軒（1630～1714）は彼の『養生訓』のなかで、「人の身は百年を以て期とす。上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十なり。六十以上は長生なり。……五十以下短命なる人多し。人生七十古来まれなり、といへるは虚語にあらず。長命なる人すくなし。五十なれば不夭と云て、わか死にあらず」と述べ、60 歳以上を長寿とし、70 歳以上は少ない、50 代での死も若死にはいえない、という当時の平均寿命的な世情を伝えている。戦後間もない昭和 22 年の統計では、男性が 50.62、女性が 53.96、復興が本格化する 25 年～27 年では男性が 59.57、女性が 62.97 とあったのが、次第に延びてきて現在は、益軒が願いを込めて示した「中寿」までを享受するようになったのである。今のような趨勢であれば、百歳の「上寿」も夢の話ではない。

このような寿命延長・高齢化社会の到来の背景には、衣食住の生活条件の向上や衛生・医療技術の発達などが手伝っているのであろう。そのおかげで、「むかし六〇、いま四二、むかしの還暦、いまは厄年」「還暦のことば、いまや死語と化し／古稀のよわい、いまや稀ならず／傘賀の時なれど、いまなおかくしゃく／卒寿の日に、いまようやく来し方を思う」といった冗談のような話も、もはやある健康な個人に限られるものではない。一般的な社会現象として頷ける時代、別の言葉を借りれば、「老後は人生のおまけでも余白でもなく、人生でもっとも楽しく生きられ、貴重な価値を発揮する、大切な時期の一つになっている」のである。

しかし、喜ばしいばかりではない。中国古代の道家思想の荘子は「夫れ大塊は我れを載するに形を以てし、我れを勞するに生を以てし、我れ佚するに老を以てし、我れを息するに死を以てす」と、人生の老年はわれわれに安楽を与えてくれる時期であると謳っていたが、老年期には人々を苦しめるさまざまな問題が潜んでいる。かえって寿命が延びたことによって、問題はさらに複雑化し深刻化しているともいえる。

（中略）2012 年に新たに閣議決定された「高齢社会対策大綱」には、「活躍している人や活躍したいと思っている人たちの誇りや尊厳を高め、意欲と能力のある高齢者には社会の支え手となってもらおうと同時に、支えが必要となった時には、周囲の支えにより自立し、人間らしく生活できる尊厳のある超高齢社会を実現させていく必要がある」という目的が定められ、「『高齢者』の捉え方の意識改革」「老後の安心を確保するための社会保障制度の確立」「高齢者の意欲と能力の活用」「地域力の強化と安定的な地域社会の実現」「安全・安心な生活環境の実現」「若年期からの『人生 90 年時代』への備えと世代循環の実現」といった 7 つの基本対策の推進を提唱している。

家族構成やあり方、それを取り巻く社会環境、ライフサイクルも大きく変わっている今日であれば、老い・老人に対する意識転換や諸政策は、是非とも社会全体の問題として取り組む必要があるし、試行錯誤を経ながらも前に進んでいくだろうと、大いに期待もしている。だが、政策的なシステムや法律だけに老人問題の解決を負わせるのは限界があろう。また、老人を捉える視点の転換は、単に政策のなかで明文化して強調するといつて、満足に達成されるものでもない。儒教倫理のなかには、制度や法律以前のものとして、家族や地域社会が取っていた敬老・養老の具体的な模様、そのように待遇する理由、または老人自身の姿勢や老後の過ごし方など、多くの論議が備わっている。生活環境や価値観は変化し多様化しているが、誰もが歳月とともに老いていくという人生の基本条件は昔と変わらないとすれば、そうした儒教の論議を、今日の視点で再吟味してみることも無意味ではなかろう。本稿は、とくに儒教経典のなかの敬老思想の本意と朝鮮儒学者の張旅軒（顕光、1554～1637）の言説にあらわれる老年の生活を考察の対象として、高齢化社会を生きる一つの示唆点を探ろうとする試みである。